

井上靖「明妃曲」論

— 匈奴への憧れの物語 —

一 はじめに

「明妃曲」は昭和三十八年二月（一九六三年二月）の雑誌『オール読物』に発表された井上靖の短編小説である。「明妃曲」は、匈奴に憧れた田津岡竜英が同じく匈奴に惹かれている「私」に、中国から匈奴に嫁いだ王昭君に関する新資料を紹介するという内容の作品である。

匈奴は中央ユーラシアに存在した遊牧民族および、それが中核になって興した遊牧国家である。匈奴がどんな民族だったかということに関しては、『漢書・匈奴伝』に「匈奴は、その先祖が夏后氏の後裔で、その名を淳維と叫ぶ。〔中略〕その家畜の多くは馬・牛・羊で、特殊なものとしては、駱駝・驢馬・騾馬・馱駝・騾・驢・驢・羊などがあつた。水や草を追うて遊牧し、城廓も定住地も農耕の生業もなかつたが、しかしやはりそれぞれの領域はあつ

た^①」と記されている。さらに、匈奴の人々は「壯健を貴び、老弱を賤し^②」むという思想を持っていた。匈奴は北の遊牧民族の中で、大きな勢力を持ち、西域の小国を撃ちながら、中国へも侵入した。秦の時代に、匈奴は遊牧騎馬民族の大帝国を築いた。遊牧民族・匈奴と定住民族・中国が真つ向から対立する情勢となつた。

中国は匈奴に対して、征伐や、和親などの策を施した。和親政策というと、王昭君のことを思い出す人が多い。王昭君は漢元帝の後宮の女性である。漢元帝は匈奴に対し懐柔政策をとつたので、王昭君を後宮から出して単于に与えた。王昭君のことが記される史書は『漢書』と『後漢書』である。『漢書・匈奴伝』には、王昭君に関する記述が次のようにある。

單于自言願婿漢氏以自親 元帝以後宮良家子王牆字昭君賜單于（中略）

王昭君號寧胡閼氏 生一男伊屠智牙師 爲右日逐王 (中略)

呼韓邪死 雕陶莫皋立 爲復株鞮若鞮單于 (中略) 復株鞮單于復妻王昭君 生二女長女云爲須卜居次 小女爲當于居次^③

翻訳 單于はみずから申し出て漢氏の女婿となりみずから親善することを願うた。元帝は後宮における良家の子王牆、字は昭君という者を單于に賜うた。(中略)

王昭君は寧胡閼氏と号し、伊屠智牙師という男子一人を生み、これが右日逐王となった。(中略) 呼韓邪が死ぬと、雕陶莫皋が立つて復株鞮若鞮單于となった。(中略)

復株鞮單于はまた王昭君を妻とし、二女を得た。長女云を須卜居次とし、次女を當于居次とした。^④

『漢書』からは、元帝に見初められずにいた王昭君が元帝の命に従って、呼韓邪單于に嫁ぎ、彼の死後、次の單于(呼韓邪單于の息子)に再度嫁いだことと、三人の子をもうけたことが記されている。一方、『後漢書』では、『漢書』と異なる箇所がある。以下に引用する。

昭君字嬙、南郡人也。初元帝時以良家子選入掖庭。時呼韓邪來朝、帝勅以宮女五人賜之。昭君入宮數歲、不得見御、積悲怨、乃請掖庭令求行。呼韓邪臨辭大會、帝召五女以示之。昭君豐容靚飾、光明漢宮、顧景裴回、竦動左右。帝見大驚、

意欲留之、而難於失信、遂與匈奴。生二子。及呼韓邪死、其前閼氏子代立、欲妻之。昭君上書求歸、成帝勅令從胡俗、遂復爲後單于閼氏焉。

翻訳 昭君 字は嬙、南郡の人なり。初め 元帝の時に良家の子なるを以て選ばれて掖庭に入る。時に呼韓邪 來朝し、帝勅して宮女五人を以て之に賜ふ。昭君 宮に入ること數歲なるも、御せらるることを得ず、悲怨を積みたれば、乃ち掖庭令に請ひて行かんことを求む。呼韓邪 辭するに臨みて大いに會し、帝 五女を召して以て之に示す。昭君の豐容靚飾たるは、漢宮に光り明き、景を顧みて裴回し、左右を竦動せしむ。帝 見て大いに驚き、意は之を留めんと欲せしも、而るに信を失はんことを難り、遂に匈奴に與ふ。二子を生む。呼韓邪 死するに及びて、其の前の閼氏の子 代はり立ち、之を妻とせんと欲す。昭君 上書して歸らんことを求めしも、成帝 勅して胡の俗に従はしめ、遂に復た後の單于の閼氏と爲る。^⑤

『漢書』では名は牆、字は昭君であるが、『後漢書』では名は昭君、字は嬙となっている。また、『後漢書』では、王昭君は元帝に見初められないことに「悲怨」の思いを募らせ、自ら匈奴の地に行くことを申し出たことと、王昭君が次の單于に嫁ぐことに抵抗し、漢に戻ることを希望したことが記されている。『漢書』と『後漢書』を比べると、『漢書』の方が王昭君に関する記述が少ない

し、両者で異なる箇所もある。その謎めいた境遇に興味を持ったことで、中国の詩人及び作家はこの王昭君の話を題材として多くの作品を創作した。これらの中国の詩と小説の中では、漢の王昭君が単于に嫁したことが、悲劇的に描かれている。つまり、中国では、王昭君は悲しい運命を持っているヒロインというイメージが強くあつたと考えられる。

王昭君の悲劇の物語は中国だけではなく、日本でも雅楽に伝えられ、能楽にも取り入れられてよく知られている。井上靖はエッセイ「西域に招かれた人々」において「西域に関係した悲劇で最も有名なものは王昭君の伝説である」と述べた。しかし、「明妃曲」では、田津岡竜英の示した新資料の中で、「元帝を憎み、匈奴の若者を愛した」という匈奴に憧れていた王昭君像が記されている。井上は、いったいなぜこのような王昭君像を創作したのであろうか。それは、作品中で何回も描く「貧相」な体躯を持つていたが、精神的に匈奴のような「古代の遊牧民族の持った端倪すべからざるエネルギー」に鑽仰の念を抱いた田津岡竜英の姿と深くかかわっている。さて、「明妃曲」の結末には、田津岡竜英が大陸の戦争で戦死したことが描かれる。そこには、昭和十二年（一九三七年）に井上が二等兵として中国行軍体験を行ったことが色濃く表れている。

井上靖の「明妃曲」に関する先行研究は、管見によれば、趙建萍の「試分析井上靖『明妃曲』中的昭君形象」のみである。先行

研究では、井上が戦後の自由を求めた女性を象徴するために、自由と愛情を追求する王昭君を描いたことを指摘している。

本稿では、先行研究とは違った観点から、作品の中の匈奴及び王昭君に関する記述と中国の史料を比較して、井上が創作した箇所を指摘する。「明妃曲」の中で、「私」と田津岡竜英が匈奴に憧れる理由を考えていき、どのような王昭君像が描かれているか。王昭君の故事を通して何を伝えようとしたかを論究する。そして、田津岡竜英の結末と井上の行軍体験の関連性を明らかにしたい。

二 匈奴に憧れていた「私」と田津岡竜英

「明妃曲」の冒頭には、「学生時代に匈奴に憑かれる一時期を持った」という記述がある。本章では、匈奴に関する中国史料と比較し、匈奴という国家の特徴を考察する。さらに、「私」と田津岡竜英が匈奴に憧れる理由を分析していく。

まず、匈奴の習俗について比較検討したい。匈奴という国家の習俗については、『漢書・匈奴伝』に次のように記されている。

自君王以下咸食畜肉 衣其皮革 被旃裘 壮者食肥美 老者飲食其餘 貴壯健 賤老弱 父死 妻其後母 兄弟死 皆取其妻妻之⁸

翻訳 君王より以下みな家畜の肉を常食とし、その皮革を身にまとい、旃裘を着た。壮者は肥肉を食い、老人は余りものに甘

んじ、壮健を貴び、老弱を賤しんだ。父が死ねば継母を納れて妻とし、兄弟が死ねば、すべてその妻を取っておのれの妻とした。⁹⁾

「明妃曲」では、匈奴の習俗が次のように描かれている。

君王より以下尽く畜肉をくらい、その皮革を着、皮衣を被り、壮者は肥美をくらい、老者はその余りをくろう。壮健を貴び、老弱を賤しむ。父死すればその後母を妻とし、兄弟死すれば、みなその妻を取ってこれを妻とす。——ざっとこういった民族である。

前述した『漢書・匈奴伝』と比較すると、匈奴の習俗に関する記述は作品とほぼ同じだと判断できる。このことから、井上は『漢書・匈奴伝』を参照し、匈奴の習俗を描いたことが分かる。また、『漢書・匈奴伝』には、匈奴は「水や草を追うて遊牧し、城廓も定住地も農耕の生業もなかった」と記されており、匈奴という民族は狩猟を生業としていたことが分かる。このような特殊な生活様式なので、匈奴の人々は騎射することを得意としていた。『漢書・匈奴伝』からは、定住民族・中国の習俗と全く違って、匈奴は野蛮な民族だと考えられていたことが窺える。

「明妃曲」には、井上は匈奴がどんな国であるかを説明するた

め、匈奴の君主・冒頓に関する二つの挿話を書いた。ここからは、この二つの挿話について説明する。まずは一つ目である。『漢書・匈奴伝』では、以下のように記されている。

單于有太子 名曰冒頓 後有愛閼氏 生少子 頭曼欲廢冒頓而立少子 廼使冒頓質於月氏（中略）月氏欲殺冒頓 冒頓盜其善馬 騎亡歸（中略）冒頓廼作鳴鏑 習勒其騎射令曰 鳴鏑所射而不悉射者斬（中略）已而 冒頓以鳴鏑自射善馬 左右或莫敢射 冒頓立斬之 居頃之 復以鳴鏑自射其愛妻 左右或頗恐 不敢射 復斬之（中略）從其父單于頭曼獵 以鳴鏑射頭曼 其左右皆隨鳴鏑而射殺頭曼 盡誅其後母與弟及大臣不聽從者 於是冒頓自立爲單于¹⁰⁾

翻訳 単于に太子があり、名を冒頓といった。のち単于の寵愛する別の閼氏に末子が生れると、頭曼は冒頓を廃して末子を太子に立てようと思ひ、そこで冒頓を人質として月氏国に遣つた。（中略）月氏は冒頓を殺そうとしたが、冒頓は良馬を盗み、これに騎つて逃げ帰つた。（中略）冒頓は鏑矢をつくつて部下に騎射の訓練を施し、「わしが鏑矢で射たものを、そのとおり射ない者があれば、斬る」と命じた。（中略）やがて冒頓は鏑矢で自分の良馬を射たが、左右に従う者で憚つて射ない者がいたので、冒頓はたちどころにこれを斬つた。やがて、こんどは鏑矢で自分の愛妻を射た。左右の者のうち、ある者

はすこぶる恐れて、射ようとしなかったので、やはりまたこれを斬った。(中略)父の単于頭曼に従うて獵をしたとき、彼は鏑矢で頭曼を射、左右のものもまたみなそれに随って鏑矢を射て頭曼を殺し、自分の継母と異母弟および服従しない大臣をことごとく誅殺した。¹²⁾

「明妃曲」にも同じような挿話がある。

冒頓の父は冒頓に単于(王)の位を譲ることを好まず、寵妃の生んだ子を後継者に立てようと謀り、冒頓を月氏に人質として送り、その上で月氏を攻撃した。冒頓は月氏の馬を盗んで逃げ帰って来ると、部下を連れて狩獵に行き、鏑矢で自分が狙ったものを射ることを命じた。

冒頓は先ず自分の愛馬を射た。射なかった部下は直ちに斬った。(中略)斯くして冒頓は父と共に狩獵に出、その父を射た。部下の矢はいっせいに冒頓の父の体を貫いた。こうして冒頓は父に替って単于になったのであった。

『漢書・匈奴伝』の中に記された挿話と「明妃曲」での記述を比較すると、挿話内容は、ほぼ同じだと考えられる。このことより、井上は『漢書・匈奴伝』の中から、冒頓に関する挿話を描き出したのだと分かる。

次に、二つ目の挿話を説明する。『漢書・匈奴伝』の該當箇所を、次のように引用する。

冒頓既立 時東胡強 聞冒頓殺父自立 廼使使謂冒頓曰 欲得頭曼時號千里馬 冒頓問羣臣 羣臣皆曰 此匈奴寶馬也 勿予 冒頓曰 奈何與人鄰國愛一馬乎 遂與之 頃之 東胡以爲冒頓畏之 使使謂冒頓曰 欲得單于一闕氏(中略) 遂取所愛闕氏予東胡(中略) 東胡使使謂冒頓曰 匈奴所與我界甌脫外弃地 匈奴不能至也 吾欲有之 冒頓問羣臣 或曰 此弃地 予之 於是冒頓大怒 曰 地者 國之本也 奈何予人 諸言予者 皆斬之。(中略) 遂東襲擊東胡。¹³⁾

翻訳 冒頓が立つて後、当時強盛であった東胡は、冒頓が父を殺して自立したことを聞くと、すぐ使者をつかわして、「頭曼が在世のころ所有していた千里馬と号称される名馬を譲り受けたい」と冒頓に申し入れた。冒頓が群臣に諮ると、群臣はこぞつて、「これは匈奴の宝馬ですから、与えてはなりません」と反対したが、冒頓は、「何と人と国を隣り合うからには、その好として、たかが馬の一头、何で惜しかろう」と言つて、ついにこれを与えた。その後しばらくすると、東胡は冒頓がわれを畏れていると思ひ、また使者をつかわして、「単于の闕氏の一人を譲り受けたい」と申し入れて来た。(中略) ついに愛する闕氏の一人を東胡に与えた。(中略) 東胡が使者をつか

わし、「匈奴の甌脱の外方の、わがほうと境する棄地へは、匈奴は立ち入らないように。わがほうでこれを領有したいと思う」と冒頓に申し送った。冒頓が群臣にはかると、ある者が、「それは棄地ですから、与えてもよろしいと存じます」と言った。すると冒頓は大いに怒って、「土地というものは、国家の基本である。どうして人に与えられよう」と言い、与えても好いと言った連中をみな斬った。(中略) ついに東のかた東胡を襲撃した。¹⁴⁾

「明妃曲」では、『漢書・匈奴伝』によく似た話が以下のように描かれている。

東胡という遊牧民族が冒頓に馬を要求して来た。冒頓は部下に謀り、反対を押し切ってこれを与えた。東胡は次に愛妃を要求して来た。冒頓はまた部下の反対を押し、これを与えた。東胡は三度目に自国と匈奴との間に横たわる無人の荒蕪地を要求して来た。部下のある者はこんどは賛成した。すると冒頓は「土地こそ国の本である。これを与えることができようや」と言って、賛成した部下を斬り、直ちに進撃して東胡を討ち、これを亡ぼした。

匈奴にとつては、千里馬でも、愛妃でも、捨てることができる。

ただ土地は国家の基本的なものだとみなされ、だれも侵犯してはならないことが、『漢書・匈奴伝』には示されている。井上は、この史料に忠実に従い、「明妃曲」の中で、簡潔な記述で匈奴の冒頓の挿話を描いたのである。

以上、匈奴の冒頓に関する二つの挿話は、生存するために絶えず自然や家族との闘い、常に遊牧民族・東胡や中国の定着民族と争っていた匈奴の厳しい生活の現実を強調するものである。こうした環境の中、強大となったために、匈奴は戦争の中でも生き残っていったと言えるだろう。さらに、この二つの挿話から、匈奴のような遊牧民族に特有の目的のためには手段を選ばない攻撃性が分かる。

「明妃曲」には、「私」は「学校には殆ど出ないで下宿でのらくらしていた頗る怠惰な哲学科の学生」という記述がある。「私」は自分の大学生活とか、就職することについて、次のように語っている。

私は少し暗い気持で言った。実際に大学へ籍を置いて四年になるので、本当なら既にこの春卒業していい筈だったが、来年の卒業は勿論、来々年の卒業も危い状態だった。私
は学業にも興味を失っていたが、学校を卒えて自分が出て行く
社会へも何の期待も持っていなかった。就職難の時代でめ
ったに職にはありつけなかったが、たとえ職にありつけたと

しても、そこで働いて行ける自信はなかった。

(傍線は論者による、以下同)

「明妃曲」の結末には、「私が大学を出た年、私は新しく起った大陸の戦争のために応召し、それから四年の歳月を兵隊として」送ったことが書かれている。この結末から、「私」の大学時代は戦争時代に当たったことが分かる。戦争時代の日本情勢は不安定だったため、大学卒業生の就職も難しくなったのである。井上靖は昭和七年から十一年まで京都大学の哲学科の学生として過ごした。井上はエッセイ「わが青春放浪」の中で、自分の京都大学の時代について、次のように書いた。

学生といっても大学に籍を置いてあるだけで、私は卒業しなくてもいいような気持ちになっていた。中国との戦争へはいる年まで、私は京都でのらくらしていたわけであった。その間に現在の妻と結婚し、家を持った。今考えても、私が京都で過ごした時代は、何ものかに追いつめられているような暗い時代で、私ばかりでなくすべての学生が、卒業したら何をしようかといったような希望を持っていなかった。文字通り灰色の希望のない学生生活であった。(中略)
私のこれまでの生涯では、京都の大学時代が一番暗かった¹⁵と思う。

京都大学の学生時代において、井上は「卒業したら何をしようかといったような希望」を持っていなかった。日本の不安定な戦争時代では、井上だけでなく、すべての学生は就職に「希望を持っていなかった」のである。井上は、京大に「希望を持って」いなかった自分の「暗い」学生生活を、「明妃曲」の「私」に投影していると考えられる。

「私」は匈奴のことに関心を持っているので、図書館で匈奴関係の書物だけを読んだ。そのため、同じく匈奴に惹かれている図書館の事務員・田津岡竜英に注目されることになる。田津岡は「私」より三、四歳年上で、「ひどく貧相なほんのひと握り程しかない体軀」を持つ人物である。「明妃曲」には、「私」が「匈奴のファン」になったという記述があるが、それは田津岡竜英から匈奴の魅力¹⁶を教えられたからなのだろう。

ある日、「私」は大学の近くのおでん屋で、田津岡竜英に話し掛けられた。「私」はそんな「貧相な人物」から話し掛けられたという¹⁷ことで、「侮辱」を受けたような気になった。しかし、田津岡は「私」に「僕も王昭君のことは多少調べてみました」と言った。書物を書庫から出して借出人に手渡すという仕事をしている田津岡が王昭君のことを調べたという¹⁸ことは、「私」には意外なことであった。そういうわけで、「私」と田津岡は、匈奴及び王昭君のことについて話し始めた。田津岡は「私」に匈奴がどんな民族かを独自の見解で説明する。

匈奴に嫁いでいた中国の貴族の娘のことですか。そりゃ面白い。中国にとっては汚辱の歴史ということになりますな。匈奴はやたらに娘を寄越せ、寄越せと言っている。すると、中国はそれに応じている。併し、いくら娘をやっても無駄ですな。匈奴は娘は娘で貰っておいて、侵略の方はそんなこととは無関係にやってのけている。中国にとっては政略結婚ということになるが、何分相手が悪いですよ。政略結婚なんてことは匈奴には通用しない。匈奴の方が一枚上ですよ。そういうところが匈奴の桁外れのところですよ。すばらしいと言ってもいいかも知れない。兎に角、そこが匈奴という民族の箸にも棒にもかからないところで――。ほう、それは面白い。応援しますよ

「匈奴という民族の箸にも棒にもかからない」ところに田津岡は惹かれている。田津岡が「一種の情熱」を以て匈奴のことを語るのを聞いている時、「私」は「ふと自分が匈奴に惹かれる秘密に思いついた」のである。「私」は田津岡のように「肩身の狭い思いをしなければならぬ程貧弱な体」ではなかったにもかかわらず、精神的に田津岡と同じく匈奴に憧れている。作中では、「私」も田津岡も、「無能で、怠惰で、希望がなく、絶えず周囲に引け目を感じている」と描かれている。匈奴の「単純さも」、「殺伐さも」、「精悍なところも」、「私」と田津岡はひとかけらも持っていないもの

である。しかし、二人は匈奴に似ているところがある。「明妃曲」では、二人と匈奴の共通点について、以下のように描かれている。

二人は二人共実際に匈奴に似ているかも知れなかった。申し合せたように二人は小さい眼を持っていたが、その小さい眼の底に冷たく光っている得体の知れぬ自尊心というものは、匈奴人が同じような形で同じように持っているものであったかも知れない。ただ匈奴の場合はそれが行動となって現れると、反抗という形を取ったが、私たちの場合は自虐というほそほそとした湿っぽい形を取るだけの違いであった。

二人と匈奴の共通点は「得体の知れぬ自尊心」を持っていたことである。しかし、自尊心が現れる方法が違うのである。匈奴の場合は反抗の形で現れるが、「私」と田津岡は自虐の形を取るのである。暗い戦争時代の下で、「希望を持っていなかった」「私」も田津岡も、匈奴のような「遊牧民族の持った端倪すべからざるエネルギー」に対して、「心の底から鑽仰の念を禁じ得ない」と思っていた。「私」も田津岡も暗い時代状況や「希望を持っていなかった」現実生活から逃げるように、匈奴のような行動力を持っている民族に憧れたのではないだろうか。ここにおいて、「私」と田津岡が匈奴に惹かれた理由が明確にされたのである。

以上述べてきたように、「私」と田津岡は匈奴に憧れているの

で、王昭君の物語に関心を持つていく。さらに、二人とも元曲「漢宮秋」の中で描かれている王昭君の物語を「面白くなかった」と評価する。そして、「明妃曲」の中では、匈奴に惹かれた田津岡の口を借りて、王昭君の物語が描かれるのである。次章では、これまでの「私」と田津岡が匈奴に憧れた理由の理解を踏まえて、田津岡が紹介した王昭君の物語を検討していく。

三 田津岡の王昭君に関する新資料

王昭君の物語の最初の紹介は、前述したように『漢書・匈奴伝』、『後漢書・南匈奴伝』において見られる。中国では、『漢書・匈奴伝』、『後漢書・南匈奴伝』における王昭君の物語より、大分脚色され、劇として紹介されている文芸作品がある。その中で、一番有名なものは、元曲作家馬致遠の「漢宮秋」であろう。しかし、「明妃曲」では、田津岡は「漢宮秋」を「嘘ばかり書いてあって、読む者の心を打つものがない」と述べる。さらに、田津岡は「私」に王昭君について新資料のことを話した。

ここから、王昭君に関する田津岡が紹介した新資料と「漢宮秋」及び『漢書』、『後漢書』を比較していきたい。「漢宮秋」は四折に分けられる。「漢宮秋」の第一折には、王昭君がどんな人物であるかについて、以下のように記されている。

妾身王嬙小字昭君。成都秭歸人也。父親王長者平生務農爲

業、母親生妾時。夢月光入懷、復墜于地。後來生下妾身、年長一十八歲。蒙恩選充後宮。

翻訳 妾身は王嬙小字は昭君といひ、成都秭歸の人也、父親王長者は平生務農を業と爲せり、母親妾を生める時、月光懷に入り復た地に墜つると夢み、後來妾を生下ぬと、年長ずること一十八歳にして、恩を蒙り選ばれて後宮に充てられし。¹⁶⁾

田津岡が紹介した新資料では、王昭君について次のように描かれている。

王昭君は成都の生れである。名は王嬙、おさな名を昭君と言った。家は代々農を営んで旧家として近隣に知られていた。(中略)

昭君の母親が昭君を生む時、月光が懐ろにはいり、また懐ろから出て地に墜ちる夢を見た。

先に挙げた「漢宮秋」での王昭君という人物について書かれた部分と比較すると、王昭君の出身や、家庭背景や、王昭君に関する伝説など、「漢宮秋」と共通した記述があることは明らかである。井上は「昭君の母親が昭君を生む時」の伝説を借りて、「どこか月光のように煌々と照り輝いたものであり、また月光のように冷たさのあるものだった」という昭君の美貌を「明妃曲」で強調

しているのである。

「漢宮秋」には、元帝は画家・毛延寿の描いた絵をもとに後宮の美女を選び寵愛したとある。そのため毛延寿は後宮の美女に賄賂を求めた。「漢宮秋」では、毛延寿が王昭君に賄賂を求めた台詞が、以下のように描かれている。

某毛延壽、領著大漢皇帝聖旨、偏行天下。刷選室女、(中略)名喚王嬙、字昭君、生得光彩射人、十分艷麗、眞乃天下絶色、爭奈他本是庄農人家、無大錢財、我問他要百兩黃金、選爲第一、他一則説家道貧窮、二則倚著他容貌出衆、全然不肯、(中略)只把美人圖點上些破綻、到京師必定發入冷宮。

翻訳 某は毛延壽なり、大漢皇帝の聖旨を領著て、天下を偏行し、室女を刷選し、(中略)名は王嬙と喚び、字は昭君なり、生得光彩人を射、十分に艷麗にして、眞に乃ち天下の絶色なれど、爭奈せん他は本是れ庄農人家にして大なる錢財無し、我は他に百兩の黄金を要め、選びて第一と爲さんと問ひしに、他は一則には家道貧窮なるを説ひ、二則には他の容貌衆に出でたるに倚著て、全然肯せず、(中略)只美人圖を把つて些の破綻を點上なば、京師に到り必定冷宮に發入て¹⁷⁾。

王昭君は「家道貧窮」なので、毛延寿に賄賂を渡さなかった。そのため、毛延寿は王昭君の顔を醜く描いたのである。しかし、「明

妃曲」の田津岡が紹介した新資料の中には、王昭君は毛延寿に賄賂を渡さなかった理由が次のように描かれている。

王昭君は毛延寿の要求をいつも退けていた。他の女たちのような惨めさを味わうのも厭だったし、元帝その人にも何の心も動かなかった。気品があると言えば気品があるのかも知れなかったが、いつも無表情な冷酷そうな顔をしている天子は、昭君には不気味に思われた。

「明妃曲」の田津岡が紹介した新資料の中には、元帝は「いつも無表情な冷酷そうな顔をしている」人である。王昭君は元帝に「何の心も動かなかった」ので、毛延寿に賄賂を渡さなかったと描かれている。この部分は、井上が意図的に改変したところだと推測できる。王昭君が初めて匈奴の若い使者に会う時の気持ちをより効果的に示すために、井上が意図的に創作したものと考えられる。作中では、王昭君が初めて匈奴の使者に会った時の気持ちを以下のように描いている。

昭君は初めて匈奴の使者の前に出て、相手から烈しい眼光で見詰められた瞬間、殆どそこに立っていることができないうような戦慄を感じた。五体はわなわなとわななき、声は口から出なかった。使者は三十五、六歳の烈しい顔をした若者だ

った。細面で、色は黒く、額は狭く、眼だけが猛鳥の眼のように強かった。(中略)

昭君はその使者が帰ったあとで、彼が呼韓邪单于の第一子であるということを知った。そしてその青年に対する恐怖感
は、その時ばかりでなく、その後時折昭君に思い出された。

王昭君が若い匈奴の使者と会った場面及びその時の気持ちに関する記述は、史料『漢書・匈奴伝』、『後漢書』にも、元曲にも描かれておらず、井上の創作だと考えられる。作中の田津岡の新資料では、元帝の後宮に入った王昭君は、「十年間囚人と全く同じ生活」をしたと描かれている。後宮の女は元帝の人形のようなものであり、元帝は好きな人形を選んで、豪華な生活を与え、厭になつたらすぐ捨ててしまう。後宮での生活は王昭君にとつて暗く不安であり、希望が見えないものだったと考えられる。若い匈奴の男性の眼に映った時初めて、「王昭君という一箇の人形は王昭君という一人の女性になった」と作中に描き出されている。匈奴の若者の「烈しい顔」は、元帝の「無表情」の顔と違って、王昭君に戦慄を感じさせ、愛という感情を初めて知ったのだ。

「漢宮秋」の一、二折では、会話の形で、王昭君が元帝に寵愛された過程、なぜ匈奴の呼韓邪单于が元帝に王昭君を求めようになつたのかが書かれている。しかし、「明妃曲」では、簡単な叙事文で「漢宮秋」と同様の内容が描かれている。

昭君が琵琶を弾いている時、それが城内を逍遙していた元帝の耳にはいり、召されて元帝の前で琵琶を弾じた。そしてそうしたことがあって二、三日してから、昭君は宮殿の新しい一室に移され、元帝の寵幸を受ける身になった。(中略)

昭君の生活は急激に変化したのが、急激に変化したのは生活許りではなかった。昭君は初めて女として自分の心の内部に烈しい愛情と憎悪の念のあることを知った。昭君は自分が元帝を憎み、匈奴の若者を愛していることを知ったのである。(中略)

毛延寿は元帝の後宮に王昭君という美女がいるから、それを妃として迎えるべきだと呼韓邪单于に奏上し、单于がその意見を採用したのであった。(中略) 廷臣が集められて、このことが議せられた時、昭君は、自分一人が犠牲になれば万事うまく収まることだから、是非匈奴に遣つて戴きたいと申し出た。

「漢宮秋」の二折の後半部分では、元帝が王昭君を匈奴に嫁さなように、臣下と対策を協議することが大幅に書かれている。しかし、井上はこの部分を省略する。その代わりに、「漢宮秋」に書かれておらず、元帝に寵愛されたが、「元帝を憎み、匈奴の若者を愛している」王昭君の気持ち「明妃曲」に描き出されている。匈奴の若者を愛しているので、王昭君は自ら匈奴に赴く決心を

した。王昭君は自分を迎えに来た呼韓邪とその部衆に連れられて長安の都を発つて行く。そして黒河という国境の河の畔まで行って、王昭君は黒河に身を投じた。このことについて、「漢宮秋」の中で「漢朝皇帝妾身の今生已矣、尚來生を待たん也。（江に跳ぶ科を做す¹⁸）」と記されている。「漢宮秋」には、王昭君が国の犠牲になり、自分で決意して匈奴に嫁いで行ったが、漢土と離れる悲しみに耐えられなくなつて、国境の黒河に身を投じてしまうことでその生涯を終えた。「明妃曲」での、「漢宮秋」と同じく昭君が黒河に身を投じた箇所を以下に引用する。

昭君は、自分が嫁するのは誰であるかと七十歳の老单于に訊ねた。昭君はまさか自分が老单于に嫁するとは思っていなかった。昭君の臉には老单于の第一子であるあの若者の烈しい面が刻まれてあつたのである。（中略）

昭君は肌の冷え上がるような夜気の中に暫く立っていたが、番兵の許を離れると、大河の岸をめがけて走り、そのまま河中に身を投じた。（中略）

「昭君は投身はしたが助かつたんです。」

昭君は自分が嫁ぐのは若い匈奴の男性ではなく、七十歳の老单于であつたため、投身したと作中に描かれている。「漢宮秋」では、昭君が身を投じたところで終わっているが、「明妃曲」では、

昭君は投身したが、若い匈奴の男子に助けてもらつた。さらに、若者は王昭君に次のように約束した。

「嬉娘よ、父单于に嫁げ。父单于は年老いている。やがて間もなく死がやつて来るだろう。（中略）その上で余は单于になり、汝を妃とするだろう。」（中略）

「それからもうひと言言つた。若し父单于がな何年も生きるとなれば、その時は父单于を殺す許りだ。」

王昭君の匈奴に嫁いだ生活について、『漢書・匈奴伝』では、「呼韓邪が死ぬと、雕陶莫皋が立つて復株鞬若鞬单于となつた。（中略）復株鞬单于はまた王昭君を妻とし、二女を得た¹⁹」が記されている。さらに、『後漢書』には、「呼韓邪 死するに及びて、其の前の闕氏の子 代はり立ち、之を妻とせんと欲す。昭君 上書して歸らんことを求めしも、成帝 勅して胡の俗に従はしめ、遂に復た後の單于の闕氏と爲る²⁰」という記述がある。『漢書・匈奴伝』の記述から、呼韓邪单于が死ぬと、呼韓邪单于の息子・復株鞬若鞬单于が王昭君を妻にすることが分かる。しかも、『後漢書』から、王昭君が呼韓邪单于の息子・復株鞬若鞬单于の妻にならないように帰国を求めたことが窺える。井上は作中において、王昭君が若者（呼韓邪单于の息子・復株鞬若鞬单于）を愛し、その若者に嫁ぐため、老单于・呼韓邪に嫁いだという話を描いた。匈奴の

若者の言葉は王昭君に生活の希望を与えた。若者の言うように、翌年に老単于は病死し、昭君は若者の妻になった。そして、若者が歿した後、その弟が単于になった。新単于は昭君に「故国へ帰る意志があれば」帰れると言ったが、王昭君はこれを断った。これまでの物語の筋は『漢書』『後漢書』及び『漢宮秋』に記されており、井上が創作したと考えられる。すなわち「明妃曲」では王昭君は匈奴を愛していることが強調されている。

田津岡が、暗くて「囚人と全く同じ」後宮生活から逃げて、匈奴に望んでいた愛情を見出して、匈奴で新しい生活を始めたという王昭君の物語を語った。田津岡が話した王昭君の話に対して、「私」は田津岡の「創作に違いない」が、「面白い」と考える。すなわち、未来に「希望を持っていなかった」「私」は田津岡が私説翻案した王昭君の物語に共感している。

作品中では、井上は「貧相」な体躯を持っていたが、残酷な時代状況から逃げるように、匈奴のような「古代の遊牧民族の持った端倪すべからざるエネルギー」に鑽仰の念を抱いた田津岡竜英の姿を創作した。さらに、匈奴に憧れていた田津岡の口を通して、王昭君の話は従来の悲劇の女性というイメージを取らず、匈奴に愛情を持ち、希望を持ち、「美しく素晴らし」い生活を過ごした王昭君の一生が描き出されている。現実から逃げたいと思う「私」と田津岡が匈奴に憧れたからこそ、井上は従来創作されてきた王昭君の悲劇の話とは違う自ら匈奴の人間として暮らした王昭君の

物語を書いたのだ。一方、「私」と田津岡は、王昭君の物語に希望を持ち新しい未来生活への期待を託していると考えられる。ここに、井上が「明妃曲」を創作した理由があったと考えられる。

四 田津岡竜英の戦死

「明妃曲」の結末には、「私が大学を出た年、私は新しく起った大陸の戦争のために応召し、それから四年の歳月を兵隊として送って帰還したが、私の帰還と入れ替りに、田津岡竜英もやはり兵隊として大陸へ渡って行った」と書かれている。昭和十二年九月（一九三七年九月）から昭和十三年一月（一九三八年一月）まで、井上は二等兵として中国行軍体験を行ったことが広く知られている。「明妃曲」での「私」と田津岡竜英の戦争体験は井上の中国の行軍経歴と重なって考えると考えられる。「二度目の応召で内地の連隊」に居た「私」は、田津岡からの葉書を受け取った。葉書には、次の内容が書かれている。

—— Kというところに来ています。近くに王昭君の墓というのがあります。K城の南四里の地点、漠々たる大平原のただ中であります。高さ百尺程の塚です。青い草が一面生えていて青塚と呼ばれています。ここへ来るまでに黒河を渡りまして、昭君投身の河です。河の方は本ものですが、塚の方は当てになりません。後世伝説に基いて作ったものだろうと

思います。

第五卷』の「解説 父の作品と体験」で、次のように書いた。

田津岡は兵隊として大陸へ渡って行った。K城で王昭君の墓を見た。王昭君の墓は盛唐以降、青塚と呼ばれる。青塚という言葉が常に中国の王昭君に関する詩で使われている。例えば、唐代の詩人・李白は「王昭君二首」で、「生きては黄金乏しく枉げて圖畫せられ、死しては青塚に留まり人をして嗟かしむ⁽²¹⁾」と歌った。青塚は王昭君の墓を表現する固有名詞となったのである。田津岡は

王昭君投身の河・黒河を渡ったK城に居る王昭君の墓に「塚の方は当てになりません」と述べる。すなわち、田津岡は王昭君が匈奴で一生を過ごしたことをかたく信じている。

戦後、「私」は田津岡竜英が戦死したことを知った。「明妃曲」の結末には、田津岡が戦死したことを聞いた「私」の気持ちが描かれている。

田津岡竜英が戦死したことを知ったのは戦後になってからである。どこで戦死したか判らないが、彼が匈奴のような顔をして、そのような叫び声を上げ、そのような闘いの仕方をして倒れたと思うと、私の胸はいつでも怒りとも悲しみともつかぬ感情で強く締めつけられて来る。

この結末に対し、井上靖の息子・井上修一は『井上靖の短編集

小柄な肉体で大陸の過酷な兵隊生活に耐える図書館員の無事を祈り、戦後の戦死の噂に胸を痛める結末部には感情移入であるが、事実と虚構の別を問わず、戦没者に思いを致すときの父の条件反射である。父が図書館員のように大陸で戦死しなかったのは偶然に過ぎない⁽²²⁾。

井上修一は田津岡の戦死という結末部には、「戦没者に思い」を込めた井上靖の感情移入であると指摘した。田津岡はやがて出征し、憧れた匈奴のように力尽く闘った形で終焉を迎えた。匈奴のように肉体も精神も全てを使い果たし、死んでいった田津岡の姿が描かれ、より一層戦争の残酷さが色濃く表れているのである。

五 おわりに

日本の昭和初期は戦争の時代だと考えられる。そのため、日本の社会は不安定になった。井上は昭和七年（一九三二年）に京都大学の哲学科に入学した。騒々しい社会背景の下で、就職難で、井上は未来に希望を持たず、のらくらして大学生活を過ごした。井上はこのような京大時代の経歴を「明妃曲」の匈奴に惹かれていた語り手である「私」に投影した。さらに、同じく閉塞した時代状況から逃げるように、匈奴に憧れた図書館事務員・田津岡竜

英を創作した。本稿では、作中の「私」と田津岡竜英が憧れていた匈奴のこと、匈奴に嫁いだ王昭君のこと、及び小説の結末での田津岡竜英の戦死したについて考察した。

井上は匈奴に関する中国の史料を詳細に調べており、「明妃曲」には、匈奴が行動力を持っている様、エネルギーに満ちる遊牧民族としての匈奴の特徴や、習俗なども紹介する。さらに、井上は『漢書』、『後漢書』及び元曲「漢宮秋」の中で、王昭君に関する記述を参照し、独自の創作を施した。井上は王昭君の従来中国の史料に描かれ、悲劇的な女性というイメージを捨て、「明妃曲」において、匈奴に憧れていた田津岡が紹介した新資料の中に、暗い漢朝の後宮から逃げて、匈奴という国の中で、新しい生活を始め、力強く暮らしていた王昭君を描いたのである。田津岡が話した王昭君の物語に田津岡と「私」の匈奴への憧れを託し、暗い自らの日常状態から逃げ出したいという想いを描いたのである。

さて、「明妃曲」の結末では、大陸の戦争のために、「私」と田津岡竜英が召集され、大陸へ渡って行った記述がある。残念ながら田津岡は戦死した。この結末は井上自身の昭和十二年（一九三七年）から十三年（一九三八年）までの中国の行軍体験と重なると考えられる。田津岡の戦死を通して、井上の戦没者への思いも表れている。

「明妃曲」は中国の悲しい女性である王昭君のことを題材として描かれているものにもかかわらず、井上の暗くて彷徨える京都大

学時代のこと、過酷な戦争体験への思いが表れている一作と言えるよう。

注

- (1) 班固『漢書 下巻 列伝Ⅱ』小竹武夫訳 筑摩書房 昭和五十四年十一月二十五日
- (2) 注(1) 同
- (3) 班固『漢書』古典研究会 汲古書院 昭和四十七年八月
- (4) 注(1) 同
- (5) 『全譯後漢書』汲古書院 平成二十八年九月八日
- (6) 井上靖「西域に招かれた人々」『西域』筑摩書房 昭和三十八年四月三十日
- (7) 赵建萍《试分析井上靖〈明妃曲〉中的昭君形象》《新疆职业大学学报》第十八卷第六期 平成二十二年十二月
- (8) 注(3) 同
- (9) 注(1) 同
- (10) 注(1) 同
- (11) 注(3) 同
- (12) 注(1) 同
- (13) 注(3) 同
- (14) 注(1) 同
- (15) 井上靖「わが青春放浪」昭和三十七年四月十一日より十七日まで『讀賣新聞』夕刊のシリーズ「青春放浪」に五回連載
- (16) 『国譯漢文大成 還魂記の三 漢宮秋』宮原民平譯註 國民文庫刊行會編 大正十年七月十八日
- (17) 注(16) 同
- (18) 注(16) 同
- (19) 注(1) 同

(20) 注(5) 同

(21) 大野實之助『李太白詩歌全解』早稲田大学出版部 昭和五十五年五月十日

(22) 井上修一『《解説》父の作品と体験』『井上靖短編集 第五卷』岩波書店 平成十一年四月八日

※井上靖の作品本文は、『井上靖全集 第六卷』(平成七年十月十日 新潮社)に拠る。なお、本稿の引用部分のルビは省略している。

Yasushi Inoue's *Meihi-kyoku* (明妃曲)

— A Story of Admiration for the Huns —

SU Yang

Meihi-kyoku is a short story written by the Japanese novelist Yasushi Inoue and first published in the *All Yomimono* magazine, in February 1963. It tells the story of Ryūei Tatsuoka, a man full of admiration for the Huns, the ancient nomadic people of the Western Regions of China. In it, he shows 'Watashi', the narrator and main protagonist in the novel, a new historical document about Ōshōkun (王昭君). Ōshōkun was one of the women in the palace of the Han Dynasty in China, who married a king of the Huns after leaving the Han Dynasty.

Chinese poems and novels have described Ōshōkun as a tragic heroine because she was forced by the Han Dynasty Emperor to marry a man of 'barbarian' origin. In "People invited to the Western Regions", an essay written in 1963, Inoue stated that the most famous tragedy related to the Western Regions of China was the legend of Ōshōkun and clearly shows how he also considered Ōshōkun's legend to be a tragedy. However, in his novel, *Meihi-kyoku*, Inoue depicted Ōshōkun differently and described Ōshōkun as a woman who loves a young Hun man, while hating the Han Dynasty Emperor. Why did Inoue create a different image of Ōshōkun in his novel? Key to helping solve this problem could emerge in Tatsuoka. He is a man who is relatively weak physically, which is why he respects the enormous energy of the Huns so much.

At the end of the novel, Tatsuoka dies in a battle in China, during World War II in a scene which reflects Inoue's own experience as a soldier in China in 1938. In this article, I will point out which parts of the novel were created by Inoue, comparing the description of Ōshōkun in his novel with her description in historical Chinese books and plays. I will also analyze why Inoue created a different image of Ōshōkun admiring the Huns. Finally, I will also explain the connection between Tatsuoka's death and Inoue's experience in China.

キーワード：「私」 ('watashi')、田津岡竜英 (Ryūei Tatsuoka)、王昭君 (Ōshōkun)、匈奴 (the Huns)

